

# 釈宗演老師 參考資料

## 略年譜

安政六年	(一八五九)	十二月十八日	福井県高浜一瀬家に生まれる
明治三年	(一八七〇)	十二歳	越溪について得度
明治六年	(一八七三)	十五歳	建仁寺俊崖に就学
明治九年	(一八七六)	十八歳	三井寺に俱舎を学ぶ
明治十年	(一八七七)	十九歳	曹源寺儀山に参じる
明治十二年	(一八七八)	二十歳	円覚寺洪川に参じる
明治十六年	(一八八三)	二五歳	洪川に印可され十一月立班式を行う
明治十七年	(一八八四)	二六歳	永田僧堂に禪海一瀬提唱 六月仏日庵に住す
明治十八年	(一八八五)	二七歳	慶應義塾に修学
明治二十年	(一八八七)	二九歳	セイロンに遊学
明治二二年	(一八八九)	三一歳	帰朝 永田僧堂師家となる
明治二五年	(一八九二)	三四歳	洪川遷化 円覚寺管長就任 開堂
明治二六年	(一八九三)	三五歳	シカゴ万国宗教大会に渡米
明治三四年	(一九〇一)	四三歳	「座右の銘」を著す
明治三六年	(一九〇三)	四五歳	建長寺管長兼職
明治三七年	(一九〇四)	四六歳	日露従軍僧となる
明治三八年	(一九〇五)	四七歳	建長円覚両派管長を辞し東慶寺に遷る 六月よりアメリカ、ヨーロッパ印度巡遊
明治三九年	(一九〇六)	四八歳	九月帰朝
大正三年	(一九一四)	五六歳	臨済宗大学長となる
大正五年	(一九一六)	五八歳	六月円覚寺派管長再任
大正六年	(一九一七)	五九歳	臨済宗大学長を辞す
大正八年	(一九一九)	六一歳	六月病臥 十一月一日遷化

「体格はやや小で蒲柳の質であつたが、気性は活達雄偉、頭脳は明晰俊敏で、一生涯老師の特徴として知られたあの炯々として人を射る眼光も、ただ禪道修行の結果としてのみいい切れない先天的なものがあつたようである。」

その老師が、少時から道骨峻々たる近代の大禪者、儀山、越溪、洪川老師等の鉗鏡を受け、非常意識の強い環境に育つたのである。自然、生鐵鑄成す底の漢となられたのは当然である。

「見地は明白、機鋒は峭峻、宗旨は透徹、かつ自由豁達であつた。」  
(朝比奈宗源老師)

「願りみれば、虎頭巖辺一擊裡で、初めて相見して、それから松ヶ岡の門をくぐつたことが、なんべんあつたか。そのおりおりの心持ちが今でも思い出される。ある冬の休みに山へきて、新年の七日というものを参禅に過した。夜もろくろく休まらず、朝もうつつに床を出て、少し薄暗い山を下りて道の彼方の東慶寺へ行くと、段の上に門がある。この門をくぐるのが大難関であつた。幾度か躊躇して、ついに思い切って踏み進んだ。奥のほうからお経の声がする。侍者は忙しそうに朝の仕事をしている。廊下を渡つて老師の居間へ行く。今度こそはと、力みかえつてきたその甲斐もなく、看経の声の中から、フン、とやられて、それきりとなる。その時の心持ち、もときた道をどう帰つたか分からず、もとの庵へ落ちつく。身は落ち着くかも知れぬが、心は遠くなつてゐる。その日のその晩も、それで暮れる。こんなことは一冬二冬でなかつたようと思う」（鈴木大拙）

法嗣 軒翁宗活、堯道慧訓、太嶺慧勵、大龜宋達、宝嶽慈興、晦巖常正、英宗義雄、大眉敬俊

### 偶成

花外経行月下眠 花外に経行して月下に眠る  
三衣灑灑両肩懸 三衣灑々として両肩に懸く  
有人若問東來意 人有つて若し東來の意を問わば  
笑而不応対梵篇 笑つて応えず、梵篇に対する

身は雲にこころは水に墨そめも  
旭の出る空ぞ恋しき

先師蒼龍窟起龕拈香 明治二十五年一月二十四日内葬  
先師道骨包天地 先師の道骨、天地を包み  
莫向空山覓別伝 空山に向かつて、別伝を覗めること莫れ  
正法眼藏提不起 正法眼藏、提不起  
無端滅却瞎驢辺 端無く滅却す、瞎驢辺

臨濟錄開卷 明治二十五年二月七日  
宗風不負將軍名 宗風負かず、將軍の名  
出格玄機振法令 出格の玄機、法令を振るう  
乱世英雄太平賊 亂世の英雄、太平の賊  
只余一喝圧千兵 只一喝を余して、千兵を圧す

明治二十五年雨安居制日

衲新董蒼龍先師後席	開講臨濟錄之次	乃打一偈以充會中之警策
雨点棒兮雷奔喝	雨天の棒、雷奔の喝	
諸方貶剥不曾疑	諸方の貶剥、曾て疑わず	
枉隨師命登斯座	枉げて師命に隨つて、斯の座に登る	

詣佛陀伽耶聖境懷感（明治三十九年）

遠尋靈跡至	遠く靈跡を尋ねて至り
悲喜攬心腸	悲喜、心腸を攬す
金剛座猶暖	金剛座猶暖かに
菩提樹長涼	菩提樹長しそに涼し
林禽談有漏	林禽、有漏を談じ
天籟吼無常	天籟、無常を吼ゆ
欲見如來面	如來の面を見んと欲し
青山掛夕陽	青山、夕陽に掛く

辭伽耶將還錫蘭

低回難去古靈蹤	低回り難し、古靈蹤
躊躇如離父母邦	躊躇、父母の邦を離るるが如し
清暎度橋回首處	清暎、橋を度り、首を回す處
尼連禪河水淙淙	尼連禪河、水淙々

病中次尾越萬里居士所寄之韻却际

撫來二豎為常侍	二豎撫し來たつて、常侍と為す
胸裏魔除仏又除	胸裏魔除き、仏も又除く
返本還源何處是	返本還源、何れの處か是なる
太虛空掛在蝸廬	大虛空掛かつて、蝸廬に在り

奉祝國師号 宣下誠拙和尚

空劫以前無用材	空劫以前、無用の材
有時楞櫟鳳輦來	時有つて、楞櫟、鳳輦み来る
喜看天瑞湘南下	喜び看る、天瑞、湘南に下つて
円覺海中震法雷	円覺海中、法雷を震うを

## 和歌

心よりやがてここに伝ふえればさく花となり鳴く鳥となる  
いく世にて朽ちぬ心のはの見えぬ 雪間にほふ老梅のはな  
わが身には昨日もあらず今日もあらず ただ法の為つくすなりけり  
ゆめの世にゆめの此身のしばしありて み法をぞ説く天地の為  
人のため世のためつくる罪ならば 我は厭はじ地獄の火をも

## 座右の銘

一、早起未改衣 静坐一炷香  
一、既著衣帶 必禮神佛  
一、眠不違時 食不到飽  
一、接客如獨處 獨處如接客  
一、尋常不苟言 言則必行  
一、臨機莫讓 當事再思  
一、莫妄想過去 遠慮将来  
一、負丈夫之氣 抱小兒之心  
一、就寢如蓋棺 離褥如脫履

## 夏目漱石の円覚寺での参禅体験

明治二七年 漱石 二十七歳 釈宗演老師二十五歳

公案 父母未生以前本来の面目

「もっと、ぎろりとしたところを持って来なければ駄目だ」とたちまち云われた。

「そのくらいな事は少し学問をしたものなら誰でも云える」

宗助は喪家の犬のごとく室中を退いた。後に鈴を振る音が烈しく響いた。

彼は門を通る人ではなかつた。また門を通らないで済む人でもなかつた。要するに、彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であつた。

(『門』より)

ただ私の知る限りの漱石氏の風格は、我が禪宗の白隱禪師が「吾は禪の俠者なり」といわれているが、そんなように思われてならない。元来が江戸っ子に生まれて、清廉な気質を持っていた氏は、生まれながらに禪味を帯びた人柄であつたと思う。然しながら氏の禪の修業は、修業としては大したものではなかつたが、氏の性格が仏教乃至東洋思想の根本に触れていたことは知れる。「則天去私」というのが

氏の最後の思想だ、と語られていたとのことだが、それは明らかに大乗佛教の真精神なのである。芸術としては、氏のものを何も読んでいない私が、ただ私だけの漱石氏に就いての智識から、氏の芸術なり、思想なりを推察して見れば、氏は自ら自然と融合して行って、何人にも接し得ない、さまざまな自然の姿を見出して来て、これをもつて個人なり社会なりを押し進め、高めて行くという立場に居たのではないかと思う。禅は云うまでもなく、自然と融合することを目的とする。自ら自然に近寄るのか、自然の方から近寄つて來るのか、それは知らぬが、ただ融合するのである。漱石氏はこの境地にあつて、そこから様々な思想を、具を与えて小説を作つて行つたのではないかと考えるが、どんなものであろうか。（秋宗演著『臨機應變』より）

### 蒼龍廣録卷二より

大円覚寺塔頭仏日庵主洪嶽宗演立僧、竺の錫蘭に赴き、梵学を修めんするを送る、序兼ねて訓示

經に曰く、仏の明法は俗と相背く。俗の珍とする所は、道の賤しむ所なり。清濁流れを異にする。是れ老衲平常最も信持する所の警語にして、實に世尊大師の至訓と謂つべきなり。今、演禪、突然來たつて別を告ぐ。之に問わば、乃ち言ふ、竺の錫蘭に趣き梵学を修めんと欲すと。乞う、師、一辭を賜えど。吾々を聽いて驚喜並び發す。冷笑して卒に筆を把つて、先ず授くるに、世尊如上の至訓を以てす。更に擴ひよしひらるに、忍徳の説を以て之に示して曰く、忍の明たること、日月を踰えたり。龍象の力、盛猛たりと雖も、之を忍に比すれば、万に一に如かず。七宝の耀きは、凡俗の貴ぶ所、然れどもその憂いを招き、以て災害を致すこと知るべし。忍の宝たることは終始安きを獲る。僧は十方に法施して大福有りと雖も、福、忍に如かず。忍を懷いて慈を行はずれば、世世怨み無し。中心恬然として終に災害無し。世に怙む所無し。唯忍怙むべし。忍は安宅たり。災怪生ぜず。忍は神體たり、衆兵加えず。忍は大舟たり、以て難きを渡るべし。忍は良薬たり、能く衆命を濟う。汝、忍行を持すれば、何の願か遂げざらん。往け、演禪、吾從来、仏法を領會す。仏法は諸天の宗とする所、仏三界に独歩するは、皆忍力の致す所なるを知る。汝亦仏恩に報いんが為に、忍行を忘るること莫れ。即今別に臨んで、唯忍徳を書して以て懸に充つ。一別二千里、海陸善為、勉旃、勉旃。

大日本明治二十年丁丑春二月十日

住相州路瑞鹿山大円覺興聖禪寺管長沙門 前大教正 今北洪川

### 『宗演禪話』臘八示衆より

衲、往年業風に吹着せられて、印度錫蘭島セイロンに漂泊し、帰朝の途次、更に暹羅シヤム

國の佛教を観察せんと欲して、船を新嘉坡に航<sup>シンドル</sup><sub>ヤ</sub>う。然れども身に余裕の貯蓄あるにあらざれば、辛うじてテツキパツセソジャ一の群に入れり。即ち伍する所のものは齧惡なる黒奴、醜穢なる弁漢、然らざれば傲慢暴戾なる碧眼赤鬚の人なり、顔々日々に接すれども、敬愛転た疎し。艦風面を磨し、塩雨頭を洗う、落々たる一身坐するに茵なく、臥するに室なし。五昼夜の海程、些の水とパンとを欠くこと一再のみならず、飢渴頻りに迫りて卒倒せんとするこ<sup>ト</sup>屡々なり、累々たる喪家の犬、任<sup>さきもあらばあれ</sup>他、人の蔑視することを。是の如くして船は漸く盤<sup>バンコク</sup><sub>メナム</sub>谷の渭南河に達す。時に低潮、船進むこと能わず、一夜河口に碇泊す。是れ今衲は前半生に於ける自己の定力を試験するの好機に際会せるを知らざるなり。薄暮、黒雲四方に閉して、気圧益低く、雨か雨ならず、風か風ならず、溽蒸<sup>スル</sup>が如く流汗淋漓たり。時に無数の蚊軍あり、哄然撼天動地の勢を以て、一齊に襲い来りて、衲が前後左右を刺撃す。或は私嘴を逞うし、突貫して直に鼻孔を衝くあり。或は健翼を張り、迂回して横に眉毛を掠むるあり。夜愈々深くして、人既に定まり、満船闇として、只舷灯の僅かに河底を射るあるのみ。此時蚊軍更に一層の魔力を振る、聚散倏<sup>しゅく</sup><sub>忽</sub>忽出没常ならず。手を以て撲てば足に來り、足を以て逐えば手に去り、面前に簇り背後に屯し、其煩擾紛悶殆んど言に堪えず。是に於いて思惟らく、古人、道の為に己を忘れ仁の為に身を殺す。或は雪に立つて臂を断するあり。或は錐を引いて股を刺すあり。或は刑に臨んで書を著すあり。或は痢に罹りて悟を発<sup>6-</sup>するあり。夜叉の為、餓虎の為、母鹿の為、唯大慈悲の為の故に、身を覗ること鴻毛よりも輕し。

噫。我れ何人ぞ。少より出家して父母に甘旨を供せず、六親戚な棄離す。幸に師友の誘勵を待つて、多少の佛法を習得し、些少の禪味を咀嚼す。然るに今是れ何の心行ぞや。纏かに此逆境に臨んで、靈台を攬乱すること是の如し。噫、我れ是れ何人ぞ、生きて世に益なく、死して人に知られず、如かず、今此の一齣の頑肉を以て、此の蚊軍の犠牲となし、飽くまで彼等の口腹を満たしむることを得ば、衲が意亦だ足りなん。

是の如く観じ來つて、中夜陰に甲板上に於いて、縦に衣帶を脱し裸体赤條々にして、兀然として危坐して海印三昧に入る。始は蚊軍の喊声、耳邊に喧しきを覚え、中ごろ蚊軍と自己と相和して、溽熱飢渴亦た身に在ることを省せず。終に五更に至つて、寤寐鬱鬱、胸中豁然として羽化して、太虛空界に翱翔するが如く、爽絶快絶、殆んど名状す可からず。那時一刹那、迅雷霹靂、電光一閃、驟雨沛然として至り、滂沱たる点滴頭より背に瀉いて、恰も爆布をなす。時に徐ろに眼を開いて身辺を顧視すれば、時ならざるに真紅の茱萸粒々相重りて面前に落在す。知る、是れ夜來蚊軍の血に飽きて、自ら死地に陥りたるものなるを。

諸禪徳、怪むこと勿れ。衲が家醜外に向つて擧ぐることを。卑懷唯々一箇半箇

の烈漢を得て、相俱に已墜の宗風を挽回せんと欲するにあるのみ。

達磨大師曰く

「諸佛無上の妙道、曠劫より精勤し、行じ難きを能く行じ、忍び難きを能く忍ぶ。豈に、小智小徳輕心慢心を以つて真乗を冀わんと欲するや。」と。珍重。

## 宗演禪師發願文

明治三十九年八月一日印度佛陀伽耶塔前に於て

一切衆生無始より以来、無明煩惱の雲に智慧の光を覆われて、此處に死し彼處に生じ、業道暗澹として輪廻止むことなし。我今遠く伽耶城正覺山前に來たり、本師釈迦牟尼如来を敬礼して誓いを宣ぶ。願わくは如來が曾て一点無縁の大慈悲心を以て衆生を救濟し給いしが如く、我も亦永劫不退転の信心に住して一切衆生を度脱せしめん。

そもそも一切衆生を度脱せしめんには、須く己が無始より以来熏習せる八万四千の一切の煩惱を、利刀の亂麻を断つが如く其の根蒂より断ぜざるべからず。我今正覺山前の本師釈迦牟尼如来を敬礼して誓いを宣ぶ。願わくは能く之を断尽せん。

已に一切の煩惱を断尽せんと欲せば、須く華藏法界龍宮海藏八万の法門無量の妙義より、乃至世尊拈華迦葉微笑の端的を明めざるべからず。我今正覺山前の本師釈迦牟尼如来を敬礼して誓いを宣ぶ。願わくは之を修学せん。-7-

然り、已に無量の法門を學得し、無尽の煩惱を断尽し、又無辺の衆生を度脱せしめんと欲するも、若し諸佛無上の妙道を成就するにあらずんば、万が中一にもその誓願を遂ぐること能はず。是の故に我今正覺山前の本師釈迦牟尼如来を敬礼して誓いを宣ぶ。願わくは之を成就せん。

此の四弘の誓願は我独り之を私すべき小少の者にあらず、三世の諸佛、歴代の祖師、乃至一切の菩薩、諸天、龍神と雖も、一点菩提の根性を具するものは必ず是の如く誓い、是の如く行ぜんと願う。

我幸に二千四百五十年の後、佛弟子の数に加わり、遠く中印度の聖地に来て、此の誓願を宣言することを得、珍重慶快自ら措くこと能はず。

此の四弘の誓願は車の両輪なり、循環已むことなし。鳥の双翼なり、翔翔してますます揚る。本師釈迦牟尼如來哀愍納受し給え。